

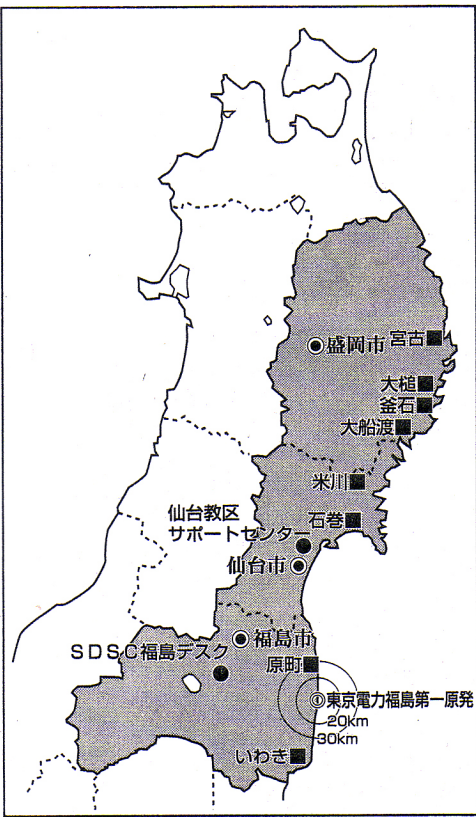


## 被災地と社会をつなぐ

### 再び岩手県大槌町へ①

昨年十二月、山口カトリック教会などが中心の冬季被災地ポラン

じ組織の春季被災地ポランティアに参加した。前回との違いは、多少の障害がある妻と一緒に参加したことだ。



三陸沿岸の八カ所のカリタスジャパンのベース

初めて参加するまで

は、ボランティアは奉仕者、支援する者と思っていた。確かにその面は強いが、実際に参加して感じたことはボランティアと被災地との関係性は「支援されるもの」と「支援されるもの」ではなく、苦しみや悲しみを共有し、ともに生きることの意味があるように思い始めた。

一回目、二回目の团长、山口教会の柴田神父は同じような意味と「痛み分け」と言われる。

妻と一緒に参加したいと思ったのは、自分が今、直面している「老いて死ぬ」という現実と被災地に生きる人たちとに何か共通性を感じ、被災が自分の問題でもあるように思え始めたこと。

もう一つ、妻が病気の後遺症で日常生活が多少、不自由になり「手

助けする者」と「手助けされる者」、つまり被災者とボランティアの関係が生まれた。夫婦だからという面もあるが、二人の関係は対等で、不自由な事実を互いの問題として受け入れる中に恵みを感じるようになった。それもボランティアの参加者の多くが「被災者の皆さんから逆に恵みをもらった」という人が多く似ている。

あえてそれにもう一つ加えれば、ボランティアの中に人間イエスの生き方、すなわち、常に弱い立場の人たちのために働かれたことを連想させられた。

とにかく二回のボランティア参加は被災地の人々のためよりも、自分自身の方が得るものが多かったことは確かだ。

そしてこのようなボランティア活動を可能にした「カリタスジャ

パン」の存在の大きさに気づかされた。

カリタスジャパンはカトリック教会のさまざまな援助・福祉活動を担当するカトリック司教協議会の中の一部門だ。

私は信徒であるにもかかわらず、教会の現状に批判的な意見を多く持つ。例えばカトリックは余りに聖職者中心であることや、現代社会の問題に対応できていない教会のあり方などなどに。しかし今回の東日本大震災に対するカリタスジャパンを中心とする教会の対応に驚きを持った。

地図のように、今回の大震災で大きな被害が出た三陸沿岸の八カ所にカリタスジャパンを中心に、ボランティアが活動するためベースを設置。その施設は信徒のためだけでなく一般の人々にも解放し、宿泊、食事などを

無料で提供している。私がボランティアとして参加したのもこの中の一つ、岩手県大槌ベースである。ここを拠点としてボランティアに参加した人は五千人を超えているという。

カリタスジャパンの活動報告によると、震災が発生した二〇一一

年の十月から一年間にボランティアベース活動を含む被災地支援に使った金額は八億三千万円を超える。二回のボランティア参加を通じてカリタスジャパンが被災地と一般社会をつなぐ重要な役割を果たしていると実感した。



大槌町の中心部は今も「荒れ野」である